

5-4					
主題	骨折後 92.8%の利用者が歩行維持をしている要因についての考察				
副題	リスクを恐れない歩行支援				
キーワード 1	骨折後	キーワード 2	歩行維持	研究(実践)期間	6ヶ月

法人名・事業所名	社福) 清明会 養護老人ホーム 浅川ホーム				
発表者(職種)	清水将太(支援員)				
共同研究(実践)者	松岡洋平(主任生活相談員)、井澤宏樹(支援員サプリーダー)				

電話	042-661-1513	FAX	042-666-7454
----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	浅川ホームは昭和31年に設立され、高尾山麓の自然の中で長年にわたり地域に根付いた福祉を展開している定員60名の施設です。利用者の個々の能力に応じ、自立した日常生活を営むことが出来るよう支援しています。さらなる自立支援に取り組むため、令和5年2月に大規模改修工事を終わりました。
-------	--

<p>《1. 研究(実践)前の状況と課題》</p> <p>私は特別養護老人ホームにて18年間介護職として勤務後、同法人の当施設へ令和4年12月に支援員として異動。利用者のほとんどが自立歩行、または歩行器で歩かれている事に驚いた。養護老人ホームだから自立されている方が多いという思いもあったが、入所者60名中24名の方が要支援又は要介護認定を受けており、精神疾患の方も60名中22名在籍されている。平均年齢81歳で認知機能が低下されている方も多く見受けられた。その状況下で転倒も多いのではないかと感じ、過去5年間の事故を調べると14件の転倒による骨折事故があった。骨折後は全員が当施設に戻られ、92.8%(14件中13件)の方が入院前と同様に歩行されていることが分かった。車椅子対応とならず歩行能力が維持されていることは、私の経験からすると驚くべき数値であった。「なぜ当施設では骨折後に歩行維持ができているのか」という疑問を持ち調査することを課題とした。</p> <p>《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》</p> <p>現在勤務している職員へ「なぜ骨折後に歩行維持できているか」ということを聞く事により、調査内容が明確になるのではないかと考え、当施設職員13名へ「歩行維持を可能にしている要因はなにか」というアンケートを自由記述で実施。アンケート結果により「環境的要因」「支援的要因」「心理的要因」に関連する回答が各8割以上あった。その為3つの要因を特定の骨折者から調査し、歩行維持の要因を明確にすることを目的とした。</p> <p>《3. 具体的な取り組みの内容》</p> <p>〈調査対象利用者〉80歳女性。(以下A氏とする。)要介護度1でシルバーカーで自力歩行されていたが、令和4年12月に転倒され左大腿骨頸部骨折にて入院。10日後手術施行。同年3月の退院カンファレンス時はシルバーカーで40m歩行可能。失禁がある為、介助は必要。長</p>
---

谷川式認知症スケール 16 点で軽度認知症の疑いあり。同年 3 月当施設へ退院。

〈調査内容〉(環境的要因) 日常生活における食堂までの移動や、主体的な行動範囲の歩数を万歩計にて 3 日間計測。(支援的要因) 職員へ歩行支援に関しての意識の聞き取り調査。A 氏の退院から令和 5 年 6 月までの支援内容を調査。(心理的要因) 歩行を頑張ろうとする理由、生活の中での楽しみや生きがい、自身の思いについて聞き取り。

#### 《4. 取り組みの結果》

(環境的要因) 主体的な行動では、3 日間平均として食堂と居室間の 1 日 3 回の往復で 5160 歩、多目的室と居室間は 1 日 2 回の往復で 2400 歩、食事の盛り付けと下膳では 1 日 3 回で 1206 歩と 1 日の歩数が平均 8766 歩となった。

(支援的要因) 歩行支援の聞き取りでは、自立支援の意識が全職員に共有されており「自立した生活を送る為には自分で歩くことが必要」という考えが職員間で根付いていた。A 氏の支援状況では、退院後車椅子とポータブルトイレは使用せず、初日から支援員見守りにてシルバーカーで歩行支援を開始。退院 5 日目には痛みの様子はなく歩行も安定されている為、あらためて生活相談員、看護師、支援員にて歩行状況を確認。見守り支援を中止しシルバーカー使用での自力歩行となる。その後も車椅子を使用せず、令和 5 年 6 月までに転倒事故件数 0 件で歩行も安定されている。

(心理的要因) 退院から 2 週間後の意向聞き取りでは「食事を食べるのが楽しみ」「自分のことは自分でやる」「ダンスが趣味」という思いや楽しみが聞かれる。また「昔やっていたボウリングがしたい」と目標をしっかりと持たれ、月 1 回のダンスクラブに必ず参加され、令和 5 年 6 月に職員と外出されボウリングや外食を楽しまれた。

#### 《5. 考察、まとめ》

A 氏の事例からご本人の歩行維持に関する 3 つの要因が考察された。その中でも「車椅子やポータブルトイレを使用しない」支援的要因が歩行維持の最大の要因と考えた。日常的に歩く事で、利用者自身の楽しみや目標が再構築され、主体的な行動により歩数が増加し、リハビリ後の筋力維持に繋がった。骨折後であってもリスクばかりに捉われず「自身で歩いて生活していただく」という職員の考えや支援が、当施設での骨折後 92.8%の利用者が歩行維持をしている要因と考察される。

#### 《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

#### 《7. 参考文献》

- ・学術情報リポジトリ「要支援・軽度要介護高齢者における歩数増加を目的とした効果的な介入について」 著者 安藤卓
- ・人間看護学研究「大腿骨骨折治療を受けた高齢患者の 1 年間の生活状況 -生活の再構築と看護師との関わりにおける事例検討-」 著者 安田千寿、北村隆子、畑野相子

#### 《8. 提案と発信》

骨折後の対応と再度転倒リスクを回避し、安全を優先する事が重要視される傾向にあるが「ご本人はどのような生活望まれているか」ということを多面的に考え、支援する事が重要である。この研究を通して皆様にも利用者の自主性や意向の実現の為に支援またはケアの要因を見つめ直すきっかけになることが望まれる。